

仙台教区報

カトリック仙台司教区本部事務局
〒980
仙台市青葉区本町1丁目2番12号
☎ 022(222)7371
FAX 022(222)7378
編集・発行 板垣 勲

待たれる司教団からの発表

みんなで続けようナイス運動



普段体験できないことを全国各地の代表者と活発に分ち合い、交流を積み重ねた第2回福音宣教推進全国会議（以下ナイス2）は、司教団に『展望』と題した答申を出して一つの区切りが付いた。司教団が受け取った答申は各教区での分ち合いから出てきた最終報告と、各地からのナイス2代表者の総意を反映したものである。

しかし、3ページにわたる答申は理解するのが容易ではないという印象を与えているようだ。その理由の一つは『展望』を読んでもテーマ「家庭」についてあまり触れられていないことがある。これは会議中にも大きな問題となり、会場は一時緊張した雰囲気にも包まれることになった。

確かに『展望』を読むと、答申内容がナイス2のテーマとどう関連するのか理解しにくい面があると言わざるを得ない。ここで私たちは一つのことを思い返した

い。つまり、ナイスは初めから日本の福音化を目指した運動であるということ。

求められる教会の刷新

ナイス2は長崎で答申をまとめるにあたり、社会に福音を証す行き方を探って来た中で気付かされたことを表明している。それはナイス1後も日本の教会が抱えている問題、つまり、教会全体の在り方を見直すなければならぬということ。

答申は単にナイス1の成果を再確認しているのではない。むしろ、日本の福音化のため信徒が一体になって刷新運動を進めなければ、新しいものを生むことも、築くことも出来ないことを語っている。

どのような組織であれ内外ともに、自らを真正面から見据えなければ新しいことは進められない。自らの足元を見直す姿勢があって、教会は社会から期待されているこ

とに応えることが可能になる。教会にとつて自らを刷新することは避けることが出来ない道である。

これからも分ち合いを

代表者の総意である『展望』は、新しいことを始めるため「教会の刷新」を考えずには何も出来ないことを明確に指摘した。教会は全体も信徒個々も、意識の刷新を求められているのである。

ナイス2の答申を受けた司教団は、4月以降に信徒に向けて文書などを出すことが予想されている。それによって、司教団が日本の教会にどのような動きを起こすにしろ、教会刷新の課題は変わることはない。信徒と共に目的達成に向けて歩むべき道になるだろう。

信徒は司教団の働きに期待しながらも、今以上に福音に相応しい生き方ができることを目指し、各地でさらに分ち合いを進めていくことがますます大事になる。

ナイス2を通して、教会が聖霊に導かれて生きる喜びが与えられることを教えられたことを忘れないようにしたい。

『展望』理解のため、ナイス2

教区代表者が分かり易く整理した別刷りの説物を挟み込んでいます。

皆さんお読みください。

教 区 代 表 者 の 声

第2回福音宣教推進
全国会議(長崎)に参加して

佐藤千敬司教(司教区本部)



日本のカトリック教会
あけて準備され、実施さ
れたNICE・2から既
に三ヶ月の時間が流れまし
た。長崎でのイベントは

終わりましたがそこで討議された事柄はこ
れからも継続してゆくべきものです。「家
庭の現実」を踏まえて、今後の「福音宣教
のあり方を探る」ということですので、古
くて新しい問題であると言えましよう。
社会の中に派遣されている教会―具体
的には、信徒も修道者も司祭も司教も全員
が含まれる「神の民」―に託された使命

は「神の福音」をすべての人々に伝えてゆ
くことです。そしてその最初の足がかりが
家庭なのです。神との交わりを深めてゆく
ために、人との交わりを深めてゆかなけれ
ばなりません。その土台が家庭なのです。
また、その掘り出しとしての信仰共同体・小
教区での交わりです。主キリストとともに
歩んでゆきましょう。

M・ブッシュ (オーストラリア)



長崎で大会が始まった
時、私の心に仙台教区へ
の帰属感がわいてきた。
それまでは修道会に対す
る帰属感はあっても教区
に帰属する感じが弱かった。私たちは長崎
での体験によって火が点けられ燃えて、一
つの魂のように感じ、兄弟的な意識が生ま

ナイス2
今後の動き

仙台教区

司牧評議会役員とナイス2
代表の集まりが1月8日に
開かれて以下のことが決ま
った。

- ・ナイス2報告会を継続す
る。期間は司教団からの
発表まで。教区代表の役
割も同時期まで継続。
- ・報告会開催についての問
い合せ先
教区本部・梅津、板垣
- ・教区報にナイス2答申の
理解を助ける文書を折り
込んで配布する。
- ・教区のナイス2後の動き
は司教団からの発表後、
司牧評役員会で検討のう
え具体化していく。

司教団

- ・特別臨時司教総会(3月
23~24日)を開いて答申
に対する司教団文書を作
成。
- ・司教団文書を正式発表
(4月以降?)

れ、旧友に会う時のような楽しい絆が出来
た。

ミサの中で、日本が一つになって祈って
いる生命であること、自分自身が何かに飛
び込む必要性を感じた。また、私たちが一
緒に何かを築こうとすればプロセスを通し
て一つとなり、兄弟となっていくことなど
を感じた。

共同体づくりは出会いであり、祈りによ
る分かち合いである。私たちは自分の時間
全存在を分かち合って生きていく。私は日
本の教会の中に生きている神秘体に触れる
恵みに与って教会の希望にふれ、神秘体の
偉大さと宝を強く感じた。

日本の教会が燃え盛るようになってほし
い。日本の教会が長崎での体験を語り、そ
の火が16教区に伝わってほしい。

小野寺 哲(釜石教会)



昨年思いがけず、ナ
イス2に出席させていた
だきました。今回の全国
会議は私にとって、これ
まで小教区単位あるいは
県・教区単位の視野で時には焦りながら、
時にはぼんやり見つめてきた教会の課題が
取り上げられました。そして、家庭の現実
から福音宣教のあり方を探るために開かれ

たこの会議は、出席者の総意により「展望
ー福音宣教する日本の教会刷新のために」
とまとめて司教団に答申しました。

私はナイス2によって自分の家庭をかえ
りみ、第二バチカン公会議からナイスまで
の大きな流れに至るまでを、貴重な体験を
通して信者の皆様と共に分かちあう事がで
きました。

ナイス2の経過は聖霊の導きであり、結
果は主イエス・キリストによって回心され
た信者の総意によるものであろうと存じま
す。神に信頼と感謝をこめてナイスの道が
豊かなものになることを願うものでありま
す。



梅津 明生 (ナイス2担当司祭)

腰痛の佐藤司教をかば
うようにして仙台教区の
ナイス2代表者12名は長
崎空港へ到着しました。

開会のミサに教区代表と
して入堂する司教・司祭・信徒3名はタク
シーで浦上教会へ、残った9名は貸切バス
の中で弁当を食べながら浦上教会へ。

ナイス2は祈りと典礼には十分に時間を
かけながら、司教も司祭も信徒も一つのテ
ーブルを囲んで話し合うことを体験しまし
た。司教、司祭が信徒に教えるのではなく

司教、司祭、信徒が同じ人間として、同じ
心で分かち合う姿に教会の豊かさを強く感
じました。

二度のナイスを体験した日本の教会は、
分かち合いの素晴らしさと同時に難しさを
も体験しましたが、福音を証しできる教会
に成長することを目指して、確実に一歩ず
つ歩んで行きたいものだと思います。

最後に準備委員会からのアンケートに、
ご協力してくださいました皆さまに心から
感謝いたします。



R・ラトゥール (野田町教会)

全国会議の答申は互い
の交わりを深め正しい信
仰に根ざした信仰者を育
成するために典礼の刷新
は欠かせません、と述べ
ています。

私は全国会議中の典礼によって、宣教の
エネルギーや信仰の分かち合いの場である
ミサを最優先したら、教会が新しい歩みを
踏み出せると感じました。

全国会議は、信仰の証人である殉教者に
倣って宣教の使命を果たす教会の姿を表わ
しました。入堂の行列は信徒、司祭、司教
が共に進み信仰の交わりである教会の事実
がわかりました。開会のミサで「和解の奉

献文」を使い、聖霊の照らしを求め恵みを
豊かに受け取ったと思います。
ナイス2は現代教会のあり方を示し、信
徒の信仰を育て暖かい教会を築き上げた
聖霊によって信仰体験を深められ、宣教す
る共同体として育っていく教会の未来の姿
を見せてくれました。

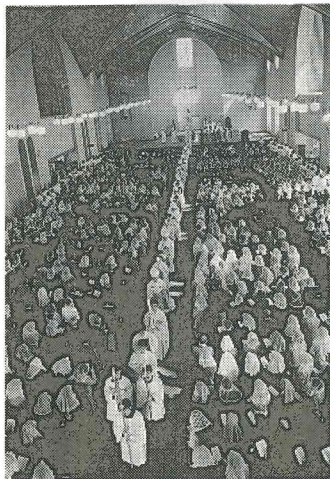
相良 ヒロ子 (原町教会)



このたびのナイス2で
全国各地の皆さまと分か
ち合いを体験させていた
だきました。誰の思いも
家庭の現実を受け止める

ことのできる教会共同体に生まれ変わるた
めにはどうすればいいのか、そんな思いで
真剣に討議していました。

私は全国会議に参加して、つくづく感じ
たのですが、今回のような分かち合いを具





や教区レベルで体験したら、もっと多くの方々がナイス運動を理解し、浸透させていくのではないかと思います。いろいろな夢や希望を持っていても、小教区の中だけで埋もれて発展していかない寂しさを経験している人はたくさんいるはずです。

「ともに喜びをもって生きよう」という第一回のナイスの流れは、他の人の喜びや苦しみは私の喜びでもあり、苦しみでもあるという体験により、愛が育まれてゆくと思えます。教会共同体がより生き生きしていくことを願ってやみません。



伊和 みつ子 (築館教会)

このたび、殉教の地長崎で開かれた全国会議に参加してまいりました。この会議が多くの方々の祈りと犠牲のもとに開

かれたこと、その恵みに与ることが出来たことを心から感謝いたします。

殉教の地を訪れ殉教者が困難のうちにあっても、神が共にいてくださることを信じて信仰の証し人となられたことを思い、今何が大切な、生活の中で何を最優先すべきかを考えることが出来ました。

神様はすてきな大地をお与えくださり、共に愛しあうことを望まれたと思うと、まさしく長崎に集った祈り、願い、希望はすべての人々の信仰の証しでした。

私たち一人ひとりには弱いけれど、神様はきつと私たちの祈りを聞き入れ、歩むべき道を示してくださいました。

それぞれに「家庭」を持つ私たちですが、教皇様が世界平和とメッセージで「家庭こそが人類家族の平和を創る。教会こそすべての人々にとって家であり、家庭である」と語っています。

私はナイス2で得た体験と恵みを多くの人々と共に分かちあうことが出来るよう努めたいと思います。



小豆畑 緑 (篠田教会)

ナイス2に参加して感じたことの一つに小教区活動の運営、内容でかなりのバラつきがあるという事です。

地域的事情等があつて違うのは当然でしょうが、ナイス2の目指す教会共同体刷新の声には司祭と信者の連携がもっと必要だし、各小教区で要職を担っているリーダーは意識的に見聞を広める必要があると思います。

その方策の一つとして県・教区レベルで刺激を与え合う情報交換の場が必要ではないでしょうか。

全国会議中、長崎教区の皆様には献身的ご奉仕をいただき、信心の篤さに触れることが出来ました。

また、カトリック新聞、心のともしび等で名前を目にする方々と間近で接し、励ましていただいたことは生涯忘れることが出来ません。

柔らかな手で私の手を包むように握手してくださいましたシスター渡辺和子には心まで暖かく包まれた気がしました。

教区の皆様には多くの祈りをいただき、無事大役を果たすことが出来ましたことを心から感謝申し上げます。



佐藤 英樹 (豊屋丁教会)

各教区の人々との語りの中で感じたことは、教会内部には宣教活動やボランティア活動をとおして積極的に社会と関わ

って生きている人々がおられるがそれはいまだ小教であり現在の教会と私たちの信仰生活は多く教会の内部、自己の内面に留まっています、社会の現実からかなり遊離しているのではないかと、もっとも社会の人々と共感・共有を求める努力を一人ひとりが、いつでもどこにおいてもしなければならぬのだということを知られました。

今、私たちが優先していく事柄としては個々にあっては愛の絆を強めるための家庭内での対話の促進であるが、教会が共感・共有ができる活動的な共同体を目指すためには

弱い立場に置かれていた様々な人々とともに歩み始めること、そして社会の経済優先の価値観への積極的なチャレンジでありそのため教会内での相互の研修が必要なのだろうと思われました。



渡辺 麗子 (聖オルギオのフランススコ)

全国会議に参加させていただいて準備段階を含め一貫してその基底には二千年前に降臨された同じ聖霊が、今尚、真にこの教会に綿々脈々として生き、働き続け、

その豊かな息吹に導かれて全国会議が『今ここに』開会されたという実感を、5点にまとめてお伝えします。

①開・閉会のミサのクレド(信仰宣言)でまさに、パパ様を中心とした教会が共に一、聖、公、使徒伝承であること。

②司教様方が全く私たちと同じ視座で、真剣に関わられたこと。

③02年のパチカン公会議からナイス1迄の25年間は日本のカトリック教会に於ては醸成期間であり今回、本来の意味に於ける信仰の土着化の第一歩を踏み込んだと感じたこと。

④どのような異論異説も恐れずに公表できる『精神の自由』が感じられる場であったこと。

⑤ナイス2事務局と長崎教区挙げての一致団結。何一つ落度の見られなかった(天候さえ)こと。



板垣 勤 (司教区本部)

ナイスが開かれる前の日本の教会には、自分が福音を宣教することを意識して生きる信徒が少なかったような気がする。

実のところ、主イエスは福音を伝えることを全ての信徒に命じているが社会で誰にでも心を開いて福音を伝えることは難しい。もしかしたら「信仰の喜びの体験」が私たちに少ないのが障害になっているのかもしれない。

しかし、私たちは長崎の全国会議で分かちあいによる喜びの体験をし、新たな福音宣教の歩みを始めるきっかけを与えられたように思う。聖霊は神の導きを信じて前進するように、多くの人の出会いを通して長崎でも話してください。



土倉 相 (北仙台教会)

今回全国会議に参加して一番強く感じたことは現在の日本のカトリック教会がもっている大きなエネルギーです。

今、大きな何かが生まれつつあるように感じられました。かつて、キリシタン時代



日本の全人口が千八百万人だったときに、全国には七十万人の信徒がいたそうです。そして、その時代に続く迫害の時には全国で四万人を数える殉教者が出、その後二百五十年の鎖国の中で、多くの人が信仰を守り続けました。

鎖国が終った時、その数はプチジャン神父が連絡をとれた人が一万、全国会議の会場となった浦上地区だけでも四千人になったそうです。

このことは、日本人の心の奥底にある根本的な信仰心に、キリストの伝える福音が大きな力ではたらきえることを、何よりもはっきり示している事実だと思います。現在の日本の教会がもつ新しいエネルギーは日本の多くの人々へ福音を伝えるために使われなくてはいけないはずで

一九九四年 年頭司教書簡

「宙心みの体験の分かち合い」(抜粋)

今回の書簡は、私自身の最近の「恵みの体験」を皆さまに分かち合うものとなります。

昨年十一月一日に入院し、椎間板ヘルニアのため手術を受けました。これまで長期入院の経験のなかった私にとりまして、四十日間の入院生活で非常に多くのことを学ばせていただいた「恵みの体験」のときでした。

まず最初にお話したいことは「祈りの力強さ」ということです。入院生活の経過を思い返しますとき、そのすべては皆さまのお祈りの賜であった、と言わざるを得ません。主キリストにおいて結ばれている兄弟姉妹の祈りの力強さを身をもって感じさせられました。

祈りの力強さとともに、医療スタッフの働きの有難さを痛感しました。痛みや苦しみのために夜も眠れないときの看護婦さんの一言やちょっとした心づかいにどんなに力づけられたことでしょう。自分の弱さと助け手の有難さを身に沁みて感じました。

それにしても世の中には、身も心も弱りはてた人々がなんと多いことでしょう。イエスの時代から二千年後の現代においても

如何に医療技術が進歩しようとも、病苦に苦しむ人は絶えません。貧しい人、苦しんでいる人のため真剣に祈らずにはいられません。

ヨハネ福音書9章に生まれつきの盲人の話があります。そこでは、生まれつき目が見えないという弱さが、救い主キリストに出会う機会となっていきます。弱い人々の中に救い主キリストの力が注ぎ込まれ、その人々の中に主キリストが現存することの証しでもあったのです。

このように思いめぐらしていますと「第2回福音宣教推進全国会議(ナイス2)」のことがあらためて想い起こされます。ナイス2は社会での現実の生活から信仰のあり方を見直し、福音宣教のための新たな歩みを踏み出そうというもの、社会での現実の生活の中で最も基本的な「家庭の現実」を見つめ、そこにあるいろんな出来事を共感・共有するために、分かち合いを繰り返して、キリストの福音に生かされている喜びを見出すことを目指したものでした。

仙台教区での今後の歩みについては、司牧評議会での検討を経て皆さんに知らされる予定になっています。

ともに生きるために

仙台スペルマン病院にホスピスを

ホスピス設置を願う会

代表 小野 敬子(二本杉教会)



私は仙台の聖ウルスラ学院を卒業した40代の聖書の言葉を借りれば「やもめ」でございます。夫は一昨年(1992年)の5月に肝硬変に悪性リンパ腫を併発して亡くなりました。私が以前から抱いていたホスピスがあれほどという単なる願いは、夫の死や親友の6年半に亘る闘病の末のガン死を通して、今はホスピス実現のために何か私に出来ることをしようという決意にも似た強い思いに変わっています。

医学のめざましい進歩によってガン患者の生存率は非常に高まりはしましたが日本人の3人に1人がガンにかかり、4人に1人がガンで命を落とすという厳しい現実があります。

ホスピス―それは決してただ死を待つための場所ではなく、もはや回復の望めない状態であるにしても、ガンの痛みから解放されて、たった一つの命を最後まで輝かしいものとして生きる場所であり、その患者の生き方を支援する場所である。私は理解しています。ところが東北には厚生省の認可したガンの緩和ケア病棟、いわゆるホスピスはただ一か所、福島県郡山市に

あるだけです。

私たち「ホスピス設置を願う会」では仙台のスペルマン病院にホスピスを設置していただきたいという思いを、昨年11月に病院側に文書でお伝えしました。私たちがスペルマン病院にホスピスをと願ったのには大きな理由があります。

医療関係者の方々がしたいと思う治療ではなく、患者さん本人が本当にして欲しいと願っていることを行なうというホスピスケアの精神は、キリスト教の精神そのものであり「あなた自身がして欲しいと望むことをあなたのまわりの人に行ないなさい」という聖書の言葉がスペルマン病院においてなら最大限に生かされるでしょうと確信したからです。スペルマン病院でホスピスケアに取り組むことは、開かれた教会を目指すカトリックの福音宣教の場、御言葉を実践する場に他ならないとも考えました。

「病院で死ぬということ」という本と著者の山崎先生によって、すっかり有名になった東京の聖ヨハネ会桜町病院のホスピス設置、運営に力をつくされた今は亡き重兼芳子さんの本「聖ヨハネホスピスの友人たち」を読むと桜町病院とスペルマン病院には多くの共通点があることに気付きます。

二つの病院ともカトリック教会を母体として元は結核患者救済のために建てられた病院であること、二つの病院とも高度医療の病院ではなく、どちらかといえば地域病

院として利用されていること、特に入院患者は60才以上のお年寄りが多く、寝たきりの手のかかる患者さんの多いことまで似ています。

桜町病院でのホスピスケアはたった一床からのスタートでした。それが今では12床になり、今春新しい独立したホスピス病棟ができてあります。

現在「ホスピスを願う会」の会員はシスターを含めて7人です。実際にホスピスケアがスタートするまでには多くの乗り越えなければならぬ課題があります。しかし私たちは、人によっては耳新しい「ホスピス」についてこれからのいろいろな場をお借りして伝えていくつもりです。

この文をお読みの皆様も新聞、テレビ、本などでホスピスをもっと知り関心を持っていただきたいと思います。そして一日も早くスペルマン病院でホスピスケアがスタートしますようお願いください。

お願いとお知らせ

スペルマン病院ではボランティア活動をしてくださる方を求めています。3月から一週間研修を行なってから、お手伝いしていただく予定です。ホスピスのことも含め、問い合わせは

病院内売店・京まで

昼のみ(011-551-1041)



93年
佐藤司教退院

11月4日に椎間板ヘルニアの手術を受けた佐藤司教は、経過順調のうちに40日にわたった入院生活を終えた。退院後、すぐに公務に復帰したが体力回復のため運動に心掛けている。



新しい賛美の歌仙台フェスティバル

カトリック研修センター主催の「新しい賛美の歌仙台フェスティバル」が11月13日に司教区センター聖堂で行なわれた。発表者、聴衆ともに喜びあった。

信仰教育委員会全国担当者会議

司教区センターを会場に、信仰教育委員会の全国担当者会議が11月20日から23日まで21名が集まって開かれた。この集まりは全国会議としては教区内で久々に開催されたものである。

チャペルコンサート開催

教区内4教会（本町・志家・元寺小路・松木町）で12月上旬に女子パウロ会テカラサウンド主催の、古楽器と歌によるコンサートが行なわれた。コンサートは他の教区でも行なわれ、どこでも盛況。

浪打教会聖堂増改築

信徒の力を集めて聖堂の増改築工事を進めていた浪打教会では、11月17日に工事終了により祝別式を行なった。

94年

八木山幼稚園新築落成

今春から園舎新築工事をしていた東北カトリック学園八木山幼稚園の工事が無事に終わり、明るくきれいな園舎が出来上がり、落成式が1月22日に行なわれた。

仙台北百合学園、河北賞受賞

東北地方の学術、芸術、その他の社会活動を対象に功労者を表彰する第43回河北文化賞が仙台北百合学園に授与された。一世紀にわたるキリスト教主義教育の功績を認める同賞の受賞式は1月17日であり、仙台南綱女学院も同賞を受けた。

編集 後記

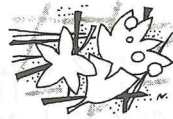
日本の教会はどう変わるか。ナイス2の『展望』は司教団の手を経て、信徒を前に押し出すものを生み出すことでしよう▼長崎の会議から青年たちの具体的な動きが始まりました。教会の刷新人が動くことが肝腎▼若いも若きも、本格的な共に喜ぶ生き方をしたい

マリー・ドミニク・モリソン神父 帰天

1993年12月17日、マリー・ドミニク・モリソン神父は胃ガン、ガン転移により福島市西部病院で帰天しました。

葬儀は佐藤司教の司式により12月20日に野田町教会で行なわれた。

カナダ・バンクーバー市出身。聖ドミニコ会員として1954年に司祭叙階。同年11月に来日し仙台教区に着任。各種の研修後、郡山、東京、大町、野田町教会で司牧その他の役職を歴任。野田町教会は30年間余り司牧し、幼稚園長としても多くの人たちに親しまれた。



読 書 安 楽 内

「宣告」 加賀 乙彦（新潮文庫）

この本は大人向けです。短気な人向けの長編小説。わたしという存在のほんとうの根拠は何か。わたしの父や母は、わたしの根拠なのだろうか。この小説は死刑囚の過酷な現実をとおして、そのような問いを読者につきつけてきます。そして、読み進めてゆくと、わたしの存在の根拠はわたしじゃない。父や母でもない。わたしや父や母をも在らしめる「何か」であることを読者に考えさせます。でも、その「何か」とは何か。

(K・M)